



フローディア

52編はダビデの詩、マスキール(瞑想)です。端書きにエドム人ドエグがサウルのもとに来て「ダビデはアヒメレクの家に来た」と告げた時(52:2)とあるように、ドエグの密告事件が下敷きになっています。ドエグはサウルの家臣で、エドム人の牧者、つわもの(サム上21:8)です。ドエグが告げた後、サウルは祭司アヒメレクを呼び出し、ダビデを助けた罪で、アヒメレクたちに死罪を言い渡しました。家臣たちは祭司を手にかけて殺すことはできませんでしたが、ドエグはその命を受けて殺しました。

51編の冒頭の「力ある者よ」とは、サウル王を指しています。サウルは誇り高いベニヤミン族で、背の高い美青年でした。預言者サムエルに見いだされ、王となりましたが、物欲が強く、気が弱い面がありました。サウルが神の声に聴き従わず、物欲に捕らわれたのを見て、サムエルはサウルを王位から退けると宣言しました。サムエルはダビデを選びました。ダビデはサウルの忠実な家臣であり、サウルの娘婿、息子の親友となって、サウルと共に敵と戦い、民から絶大な支持を得ていました。サウルは権力、財力から離れられませんでした。サウルは嫉妬、敵愾心のため、気を病み、嘘を重ね、ついにダビデを追放し、命を狙うまでになりました。ダビデに好意を寄せる者もこのように殺される事態になりました。ダビデの両親もモアブ王にかくまってもらわなければならない状況でした。

サウルは地位を守るために悪事、嘘を重ねます。彼にとっては、慈しみ、善、正義は余計なものでしょう。それは悲しい権力者の姿です。詩人は 神はお前を打ち倒し、永久に滅ぼされる。おまえを天幕から引き抜き／命ある者の地から根こそぎにされる(52:7) と歌います。「見よ、その男は神を力と頼まず／自分の莫大な富に依り頼み／自分を滅ぼすものを力と頼んでいた。」(52:9)とあるように、やがて、サウルはペリシテとの戦いに負け、自決し、王家は滅亡します。この事実を見て、神に従う人は神を畏れました。

詩人は わたしは生い茂るオリーブの木。神の家にとどまります。世々限りなく、神の慈しみに依り頼みます。あなたが計らってくださいますから／とこしえに、感謝をささげます。御名に望みをおきます／あなたの慈しみに生きる人に対して恵み深い／あなたの御名に(52:10) と、信頼と賛美を捧げます。

53編は14編と似ていますが、端書きに「マハラト(曲名?)に合わせて、マスキール(瞑想)」が付け加えられています。また、英語訳聖書では、53編にはGod(神)だけが使われていますが、14編ではGodのほかにはthe Lord(主)も用いられています。それ以外では、6節が全く異なっています。

それゆえにこそ、大いに恐れるがよい／かつて、恐れたこともなかった者よ。あなたに対して陣を敷いた者の骨を／神はまき散らされた。神は彼らを退けられ、あなたは彼らを辱めた。(53:6) であるのに対して、14編では

そのゆえにこそ、大いに恐れるがよい。神は従う人々の群れにいます。貧しい人の計らいをお前たちが挫折させても／主は必ず、避けどころとなってくださる。(14:6) と記されているのです。53編では、「あなた」を「神を畏れる者、ダビデ」、「陣を敷いた者」を「神に背く者、サウル」と読み取ることができます。そして、53編は「神に背く者」に対して裁きと警告の言葉の賛歌であり、14編は「貧しい者」への慰め、励ましの言葉となっていると感じます。2編ともに最後に、どうか、イスラエルの救いがシオンから起こるように。神(主)が御自分の民、捕われ人を連れ帰られるとき／ヤコブは喜び躍り／イスラエルは喜び祝うであろう。(53:7) と、捕囚からの解放の願いと、喜びを捧げています。「讚美歌21」には52、53編に関連する讚美歌はありませんが、私は399「さすらいの民よ」(棚橋峯子作詞・岸一隆作曲)を賛美したいです。